日本語と中国語の文脈指示詞の研究
—談話モデル理論からのアプローチ—

劉　驫
京都大学大学院博士課程
日本学術振興会特別研究員DC

１．はじめに

- 本研究は談話モデル理論（東郷2000）を理論的枠組として、対話における日本語と中国語の文脈指示詞「コ・ソ」と「这・那」の用法を明らかにすることを目的とする。
- また、対話の場合、日本語ではソがデフォルトであるのに対して、中国語では「这」がデフォルトであるとされている。本研究はこの違いの解明を目指す。

２．研究背景

- 日本語指示詞に関する伝統的な研究では、現場指示的用法を中心に扱われてきている。文脈指示的用法を扱ったものとして、久野（1973）、黒田（1979）、金水・田窪（1990）、田窪・金水（1996）、東郷（2000）などが挙げられる。
- これらはソとアの対立に関する問題を中心に扱ったもので、コとソの対立に関する問題は本格的に研究されていない。

２．研究背景

- 堀口（1978）が現場指示的用法と一貫して、「自己に関わりの強いもの」「自己に関わりの弱いもの」のように、距離区分説をもとに、コとソの文脈指示的用法を規定している。
- 本研究は基本的には堀口の説を支持するが、「関わりの強い・弱いもの」といった曖昧な主張を理論的に説明する。

２．研究背景

- このほか、庵（2007）がこれまであまり扱われてこなかったコとソの対立に関する問題を積極的に扱っている。
- 日本語の文脈指示を扱った従来の研究では「文」を最大の単位とされてきているのに対し、庵は文レベルの上位にあるテキスト・レベルから文脈指示を扱っていることは評価できる。

２．研究背景

- しかし、庵は現場指示と文脈指示を全くに別のものとして捉えており、文脈指示の中心的な用法は現場指示とは別の原理(「結束性（Halliday&Hasan1976）」)によって支配されると指摘している。
- これに対して本研究は全く逆の立場を取り、文脈指示的用法と現場指示的用法には連続性があること主張する。

２．研究背景

- 中国語の文脈指示詞「这」「那」に関する研究は、沈（1999）、胡（2006）、楊（2010）などがある。
- 沈（1999）は「这」が無標であり、「那」が有標であるということを主張しており、胡（2006）は心理距離が実距離より重要で、心理的に近ければ「这」、遠ければ「那」が用いられると指摘しているため、堀口（1978）の説に近い心理距離説を主張している。

２．研究背景

- 楊（2010）は、「这」は「一時的な記憶」に登録される対象を指し、「那」は「長期記憶」に登録される対象を指すと述べている。
- つまり、楊は「那」の観念指示的用法（日本語のア系指示詞に相当する）しか考察しておらず、その文脈指示的用法（日本語のソ系指示詞に相当する）を扱っていない。

３．理論的枠組みの導入

- 「文」ではなく「談話」における指示行為は、話し手だけではなく、聞き手がいて初めて行われる相互的な行為である（Brown & Yule 1983, 東郷 2000など）。したがって、聞き手を排除して指示詞の機能を記述することはできないと考えられる。

３．理論的枠組みの導入

- これまでの談話の理論は主に英語を中心に展開されてきた。しかし、指示詞を扱う際に、英語は聞き手の存在をあまり考慮せず、話し手を基準に使い分けられる（Quirk 1985）点が日本語と異なっているため、そのような談話理論は日本語の文脈指示詞の問題を扱う際に必ずしも有効とは言えない。

３．理論的枠組みの導入

- たとえば、Ariel（1990）の到達可能性理論は、すべての「定」の指示表現を扱い、それらをアクセシビリティ・マーカーと見なし、指示物のアクセシビリティの高低によって選択されるという考え方はとてもユニークなものであるが、先行詞がトピックであるか否か、先行詞と照応詞との距離や同じ段落に存在するか否かなどといったテキスト上の表層的な現象に過度にこだわり、話し手と聞き手の重要性が十分に認識されていない。
- また、Arielのアクセシビリティ・マーカー・スケールにおいては、近称と遠称しか考察されていないため、日本語の中称のソの位置づけも問題となる。

３．理論的枠組みの導入

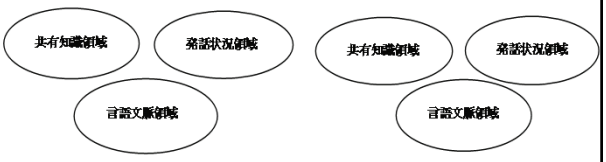
- 次に、Fauconnier（1994）のメンタル・スペース理論は、絵画のスペースや反事実仮想スペースなど、複数のスペース構築を設定することによって、指示の不透明性などの問題に解決策を提供していると考えられる。
- しかし、メンタル・スペース理論においても聞き手があまり考慮されていない。

３．理論的枠組みの導入

- このような、聞き手を排除した理論に対して、東郷（2000）の談話モデル理論 はメンタル・スペース理論に立脚し、名詞句や代名詞などの意味解釈の問題を解決するために提案され、話し手と聞き手による相互性を重視した理論であるため、日本語と中国語の文脈指示詞の問題を扱う際に有効であると考えられる。

３．理論的枠組みの導入

- 話し手側の談話モデルDM-S　聞き手側の談話モデルDM-H

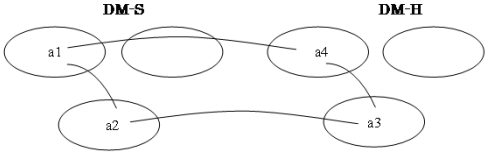


３．理論的枠組みの導入

- 共有知識領域：一般常識的な世界に関する知識及び話者個人の経験や知識に関する談話指示子（discourse referent）が格納される。
- 発話状況領域：話し手と聞き手を含む発話の場であり、この場に存在する指示対象が全て発話状況領域に登録される。
- 言語文脈領域：談話が始まる前には何も登録されず、話し手と聞き手による談話の展開につれて言語情報が入力され、累積されていく。

３．理論的枠組みの導入

- （1）ノーベル賞委員会は「核兵器なき世界」の実現に向けたオバマ氏に高く評価した。（作例）



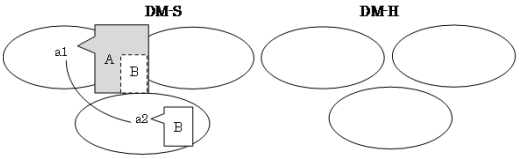
３．理論的枠組みの導入

- また、談話指示子にはそれぞれ量の異なる属性情報が付随していると考えられる。文脈指示詞の問題にとって、このような属性情報の調整作業こそ大事なポイントである。
- したがって、本研究では、東郷（2000）の談話モデル基本図に属性情報のタグをつけることにした。具体例を見てみよう。

３．理論的枠組みの導入

（2）（SとHがSの過去の経験について話している）
S: 私なんか昔の記憶紐解いてみると京都の男性で好きな人がいましたけどね。
H: そうなんだ。なるほどね、一人一人違うということで。
S: そうですね。その人はいい人でしたけどね。
（『日本語話し言葉コーパス』から引用）

３．理論的枠組みの導入



a1　話し手の共有知識領域に格納された談話指示子＝京都の男性
A　（話し手が持っている）a1に関するすべての属性情報
a2　＝a1
B　a2に関する属性情報でAの部分的なものである＝京都の男性で話し手の好きな人、いい人
Bは談話の進行につれて随時更新される。

４．考察

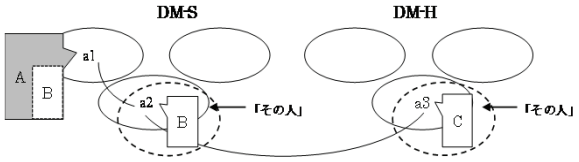
- ここからは、談話モデルを援用して、対話における日本語と中国語の文脈指示詞の用法を考察していく。まず、日本語の文脈指示詞の用法を見てみよう。

４．１　日本語のコ・ソ

対話におけるデフォルトのソ

（3）（SとHがSの過去の経験について話している）
S: 私なんか昔の記憶紐解いてみると京都の男性で好きな人がいましたけどね。
H: そうなんだ。なるほどね、一人一人違うということで。
S: そうですね。その人はいい人でしたけどね。
H: その人はいまどこでなにをしているんですか？
（『日本語話し言葉コーパス』から引用、最後の一行は作例）

４．１　日本語のコ・ソ

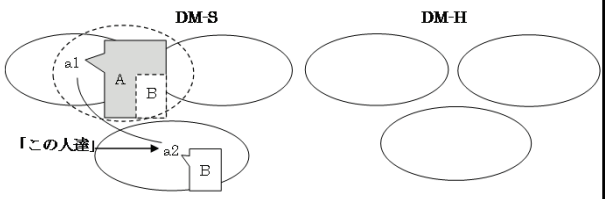


４．１　日本語のコ・ソ

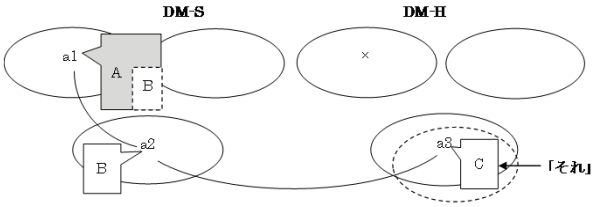
- 対話における文脈指示のコ①ー話し手のみ用いるコ

（4）（話し手が聞き手に自分だけが知っている新しい情報を伝えようとしている）
S: いまの若い人達、ポスト団塊ジュニア世代と言われている人達なんですけど、この人達が消費をしなくなったという。
H: それは初耳ですね。（『ホンマでっか!?TV』から引用、最後の一行は作例）

４．１　日本語のコ・ソ



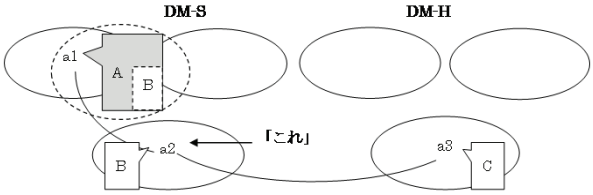
４．１　日本語のコ・ソ



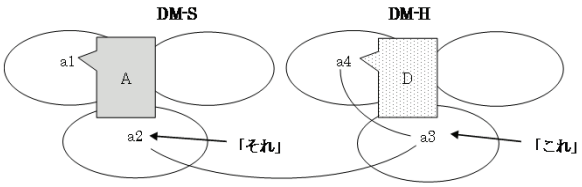
４．１　日本語のコ・ソ

（5）（SとHはグルメの話をしている）
S: 鹿児島の名物は黒豚です。ビール黒豚しゃぶしゃぶ鍋、これが美味いですわ。これ、言いたかったんです。
H: 鹿児島の黒豚の小さいものっていうのはですね、しゃぶしゃぶの時に灰汁が出ないです。これがポイントなんです。
S: それは知らなんだ！（『ホンマでっか!?TV』から引用）

４．１　日本語のコ・ソ



４．１　日本語のコ・ソ



４．１　日本語のコ・ソ

- ここでは、堀口（1978）の「自分に関わりの弱いものとして平静に指示するソ」「自分に関わりの強いものとして強烈に指示するコ」という説を談話モデル的に解釈しておきたい。
- 「自分に関わりの弱いもの」が意味するのは、どちらかが優位に立つわけではなく、話し手も聞き手も等距離から言語文脈領域にある談話指示子とその属性情報（聞き手に開示済み）にアクセスできるということである。

４．１　日本語のコ・ソ

- また、「平静に指示する」が表しているのは、自分の直接経験や体験を利用せずに指示すること、または主観的な感情を込めずに客観的に指示することである 。このことを談話モデル的に言い換えれば、話し手はa2-a1というリンクをたどらず、共有知識領域にある自分しか保持していない（a1の）属性情報Aを利用しないことを意味する。

４．１　日本語のコ・ソ

- 一方で、話し手は自分の直接経験や体験に基づいて発話する場合（例えば、自分の直接経験の場合「私には、酒好という変わった名前の友人がいる。この人は、名前とは逆に一滴も酒が飲めない。」（金水・田窪1990）、または主観的な感情を込めた発話の場合（例えば「先週、『半沢直樹』というテレビドラマを見たのですが、これが本当に面白かったですよ！」（作例））などは、堀口の「自分に関わりの強いものとして強烈に指示するコ」に相当すると考えられる。

４．１　日本語のコ・ソ

- このことを談話モデルで図示すると、話し手と聞き手は等距離から言語文脈領域の談話指示子にアクセスするのではなく、話し手は談話指示子a1と属性情報A（正確に言えば、Aの灰色の部分）にアクセスしながら、言語文脈領域に登録されたa2をコで指しているのである。

４．１　日本語のコ・ソ

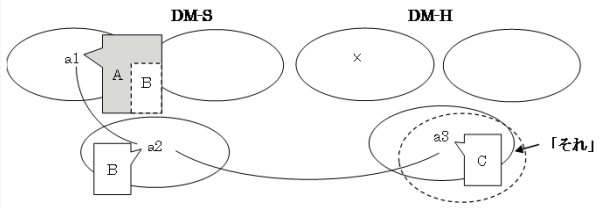
- 対話における文脈指示のコ②ー話し手と聞き手の両方が用いるコ
- 一般に、話し手の発話によって談話に新たに導入された談話指示子を聞き手が指し示すときに、ソしか用いられない（6）。

(6)（話し手の研究発表を聞いて、聞き手が質問する場合）
S:以上、私の研究発表を終わりにします。
H:その研究は果たして現場で活用できますか？
（作例）

４．１　日本語のコ・ソ

- 「ソしか用いられない」ということは、東郷（2011）の「言語文脈領域から共有知識領域への転送原則」によってうまく説明される。「言語文脈領域から共有知識領域への転送原則」とは、「当該の談話セッションが終了し、しかるべき時間が経過した後は、言語文脈領域から共有知識領域へ談話指示子とその関連情報を転送することができる」という原則である。

４．１　日本語のコ・ソ



４．１　日本語のコ・ソ

- 一般的には、談話指示子とその関連情報は聞き手の言語文脈領域から共有知識領域へ転送済みでなければ、聞き手はコで指示できないはずである。
- しかし、次の例のように、話し手の発話によって新たに談話に導入された談話指示子を指し示すときに、聞き手の共有知識領域にそれに対応するものがないものの、聞き手もコを用いて指しているのである。

４．１　日本語のコ・ソ

(7)S:（前略）（父親は）男の子との関係が良好だと、ストレス耐性、我慢強いというのはストレス耐性だって言い換えてもいいと思うんですけれども、ストレス耐性が良くなるというデータが2010年の、あの一、国際学会で発表されています。
H: ああ、なるほど。これはどういう理由でですか？
S: これはですね。実は話せば長くなるのでやめます。
（『ホンマでっか!?TV』から引用）

４．１　日本語のコ・ソ

- なお、田窪（2008）が（7）に類似している言語現象を取り上げている（例文（8））。田窪によれば、「ソ+名詞」は言語的先行詞を必要とするが、「コ+名詞」は言語的先行詞を必要とせず、時間的に近い場合には用いられると説明している。

（8）（反政府ゲリラが大使館爆破計画の失敗のあとアジトに戻ってくる。だれも口を開かない。リーダーがまず話し始める）
S: この計画／＊その計画を最初に考え出したものが大使館爆破計画の実行責任者になるべきだった。（田窪 2008）

４．１　日本語のコ・ソ

- 田窪は言及していないが、(9)の「この計画」は、本研究のいう話し手と聞き手がともに用いることができるコに相当すると考えられる。この場合には、「リーダー」である話し手はもちろん、その場にいる「反政府ゲリラのメンバー」ならだれでも「この計画」を用いることができるはずである。

(9)S: この計画／＊その計画を最初に考え出したものが大使館爆破計画の実行責任者になるべきだった。
H: しかし、まさかこの計画／＊その計画が失敗するとは…

４．１　日本語のコ・ソ

- もちろん、田窪のいう「時間的な要因」は「話し手も聞き手も用いるコ」の発動条件の一つであるが、それだけではなく、次の3つの条件を満たさないと、このようなコの用法は発動されないと考えられる。

1. 話し手と聞き手の発話状況領域は同一なものでなければならない。
2. 聞き手は話し手のトピックに深くコミットしなければならない。
3. トピックは包括的なものでなければならない。

４．１　日本語のコ・ソ

- まず、話し手と聞き手の発話状況領域は同一なものというのは、つまり「時間的な要因（田窪2008）」以外に、話し手と聞き手は同じ時間・空間を含む「発話の場」を共有しなければならないということである。もし同じ時間・空間においての発話でなければ、（7）（8）においては、聞き手はコではなく、ソしか用いられなくなる。

４．１　日本語のコ・ソ

- また、条件①が満たされている場合でも、話し手が聞き手の発表内容について疑問を抱き、積極的にコミットしようとせず、対立的な視点を取っていると考えられる。この場合には、話し手は聞き手の発話内容を自分に関わりの弱いものとして指示し、話し手も聞き手もコを用いて指すことができる文脈が発動されない。やはり、「聞き手は話し手のトピックに深くコミットしなければならない」という条件②が必要である。

４．１　日本語のコ・ソ

- 3番目の条件は、トピックは包括的なものでなければならないというものである。
- 包括的なトピックとは、談話の構成要素ではなく、談話全体、ないし一部をまとめるような抽象的なトピックである。たとえば、「話」「計画」「研究」などは包括的なトピックと見なすことができる。一方、部分的なトピックとは、「男」「町」「牛」のような談話に登場する具体的な対象を言う。部分的なトピックは、包括的なトピックに含まれる構成要素を指す。
- van Dijk（1977）の談話の主題、文の主題

４．１　日本語のコ・ソ

（10）（聞き手の研究内容について話し手が発話する）

S: この研究はまだまだ続くんだろうと思うんですが、これが終わると、どういうふうに活用されていくんですか。

H: そうですね、元々このプロジェクトは、データを作るっていうことではなくてデータそのものを作っておしまいっていうものではなくて。（劉 2011から引用）

４．１　日本語のコ・ソ

（11）（話し手と聞き手はゴミの問題について話している）

S: このゴミ問題っていうの解決について、何か、あの一青柳さんなりのご意見がおありですか？

H: ふふ、はい、あの一はっきり言って私は、あの一詳しくこのことについては存じませんけれども、ええ、なんか、うーん行政の方が、本気なのかなっていつも思います。（劉 2011から引用）

４．２　中国語の「这・那」

- 中国語のデフォルトの「这」
- 対話の場合には、中国語では話し手も聞き手も「这」を用いて指示対象を指すケースが一番多く見られる。
- この場合には、日本語のコと異なり、話し手が新たに談話に導入した情報でも、話し手も聞き手も「这」で指すのが一般的である。言い換えれば、日本語ではソがデフォルトであるのに対して、中国語では「这」がデフォルトである。

４．２　中国語の「这・那」

（12）（話し手が聞き手にあるレストランを勧めている）

S: 先月、祇園にあるカチャトーリというイタリア料理店に行ったんですよ。この／その店は最近美味しいと評判の店でしてね。

H: へえ、＊この／そのお店の味はいかがでしたか。（作例）

４．２　中国語の「这・那」

（13）（話し手が聞き手にあるレストランを勧めている）

S: 上个月，我去了祇园附近一家叫CACCIATORI的意大利餐厅。这家／那家餐厅因为很好吃最近口碑不错呢。

H: 是么，这家／那家餐厅的味道如何呢？（（12）の中国語訳）

４．２　中国語の「这・那」

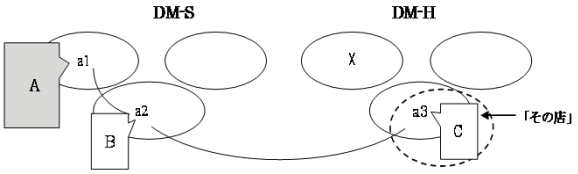
- 日本語における「言語文脈領域から共有知識領域への転送原則」とは、当該の談話セッションが終了し、しかるべき時間が経過した後、言語文脈領域から共有知識領域へ談話指示子とその関連情報を転送することができるという原則である。日本語では話し手も聞き手もこの原則に最大限に従わなければならないのである。

４．２　中国語の「这・那」

- 一方、中国語の「言語文脈領域から共有知識領域への転送原則」は日本語のものと異なり、当該の談話セッションが始まると、話し手の発話によって聞き手の言語文脈領域にコピーされた談話指示子とその属性情報は、直ちにその共有知識領域にも転送される。つまり、「談話セッションの終了」および「しかるべき時間」を必要としないと考えられる。
- この中国語の「言語文脈領域から共有知識領域への転送原則」に従えば、（12）と（13）の違いがうまく説明される。

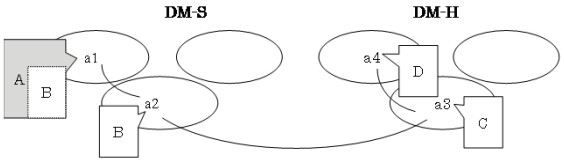
４．２　中国語の「这・那」

H: へえ、＊この／そのお店の味はいかがでしたか。



４．２　中国語の「这・那」

H: 是么，这家／那家餐厅的味道如何呢？



４．２　中国語の「这・那」

- ここで注意しなければならないのは、聞き手の共有知識領域にあるa4と話し手Sの共有知識領域にあるa1の属性情報の情報量は同じものではないということである。a4の属性情報Dはあくまでもa1の属性情報Aの一部であり、a2のBおよびa3のCによってコピーされたものである。

４．２　中国語の「这・那」

- このほか、話し手は「这」を用いることができるが、「那」を用いることができない場合がある（（14）（15））。

（14）S：其实薪酬是蛮重要的。最终来讲这／？那是一个基本点，你没有一个合理的薪酬可以说你是吸引不到人的。（トーク番組『对话』から引用）

(15)S:我觉得网上确实有一些不适宜小孩的东西，报纸上也登了受骗的孩子，家长对这个／＊那个非常关心。（トーク番組『对话』から引用）

４．２　中国語の「这・那」

- （14）では話し手は「重要（重要）」「基本（基本）」、（15）では「非常关心（非常に関心を持つ）」など、自分に関わりの強いものと示す表現を使用している。このため、「这」のほうが自然であるが、「那」を用いると自分に関わりの弱いものとして捉えるため、矛盾となってしまって不自然であると考えられる。

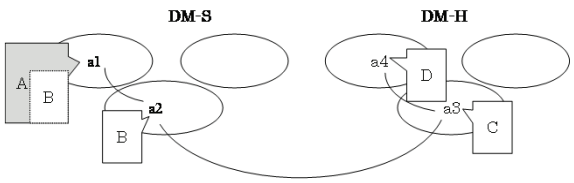
４．２　中国語の「这・那」

- 一方で、（16）のように、聞き手が話し手の発話を強く否定している場合、「这」が用いられず、「那」しか容認されない。この場合は、聞き手はあえて自分の共有知識領域に転送された談話指示子a4とその関連情報Dにアクセスせず、それを利用しようとせず、自分に関わりの弱いものとして、a3とCを指していると考えられる。

（16）S：你算了吧！你爸呀，纯属老糊涂了！

H：＊这/那是他们别人，咱爸可是越老越明白！（テレビドラマ『我爱我家』）

４．２　中国語の「这・那」



５．三人称代名詞の場合

- 日本語と中国語の三人称代名詞の場合
- 文脈指示詞の問題だけではなく、日本語と中国語の三人称代名詞「彼」と「他（彼）」の違いも、両言語の「言語文脈領域から共有知識領域への転送原則」の違いによってうまく説明できると考えられる。
- 「彼」と「他（彼）」の区別について、田窪・金水（1996）が日本語と中国語においては、聞き手が指示対象を同定できない場合には、「彼」と「他（彼）」が用いられないと指摘している。

５．三人称代名詞の場合

- しかし、次の（17）と（18）は聞き手が指示対象を同定できない例となる。日本語の場合、田窪・金水（1996）の言う通り、「彼」が使えないが、中国語では「他（彼）」が問題なく用いられる（むしろ「王老师（王先生）」を用いると不自然となってしまう）。
- このことは、田窪・金水の説ではうまく説明できない。

５．三人称代名詞の場合

（17）

S：昨日高校の時の担任、王建国先生に会ったよ。

H：＊彼／王先生は何を教えていますか？

S：＊彼／王先生は国語を教えています。（作例）

（18）

S：昨天我遇到高中时候的班主任，王建国王老师了。

H：他／?王老师是教什么的？

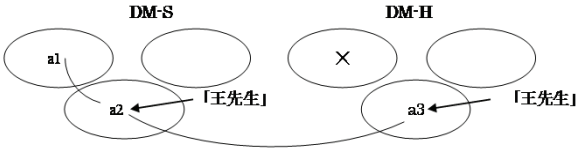
S：他／?王老师是教语文的。（作例）

５．三人称代名詞の場合

- この問題は両言語の「言語文脈領域から共有知識領域への転送原則」によって解決できると考えられる。
- まず、日本語の場合には、一般に談話セッションが終了しなければ、話し手の発話によって聞き手の言語文脈領域に登録された新しい談話指示子とその関連情報は、聞き手の共有知識領域へと転送されないため、下図のように、聞き手は言語文脈領域に登録されたa3を「彼」で指すことができない。

５．三人称代名詞の場合

- また、話し手は自分の共有知識領域にあるa1（国語の王先生）に対応するものが聞き手の共有知識領域に存在しないと判断しているため、やはり「彼」を用いることができず、言語文脈領域に登録された文脈情報の「王先生」しか用いられないのである。

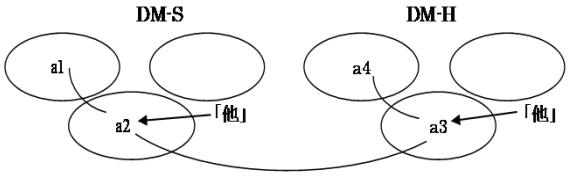


５．三人称代名詞の場合

- これに対して、中国語の「言語文脈領域から共有知識領域への転送原則」によると、当該の談話セッションが始まると、次の図のように、話し手の発話によって聞き手の言語文脈領域にコピーされた談話指示子a3とその関連情報は、直ちにその共有知識領域に転送されることになる。聞き手は共有知識領域に登録されたa4とその情報にアクセスしながら、a3を「他」で指すことができると考えられる。
- PS：英語も中国語によく似ていると考えられる。

  例　S: You know, suddenly a boy came in. He told me that…

５．三人称代名詞の場合



６．まとめ

- 文脈指示詞「コ・ソ」と「这・那」の選択原理のまとめ
- 話し手は自分の共有知識領域にアクセスしないまま、すでに聞き手に開示済みの言語文脈領域に登録された談話指示子とその属性情報を指示しているときにソと「那」を用いる。
- 一方、話し手は自分の共有知識領域に格納されている談話指示子のより豊かな属性情報（聞き手に開示していない）を利用しながら、言語文脈領域に登録された同談話指示子を指しているときに文脈指示のコと「这」を用いる。

６．まとめ

- この研究結果から、文脈指示的用法においても、現場指示的用法の距離区分説のように、話し手は自分だけがアクセスできる情報を「近い」と見なし、コと「这」で指示するが、自分だけではなく、聞き手も対等な立場からアクセスことができる情報を「近くも遠くもない」と見なし、ソと「那」で指すことが分かった。
- つまり、「コ・ソ」「这・那」の現場指示的用法と文脈指示的用法は、無関係のものではなく、その間には緩やかで統一的なつながりがあることが確認された。

６．まとめ

- また、対話において日本語はソがデフォルトであるのに対して、中国語では一般に「这」を用いるという違いは、両言語の「言語文脈領域から共有知識領域への転送原則」の違いによるものであると考えられる。
- さらに、日本語と中国語の「言語文脈領域から共有知識領域への転送原則」の違いは、文脈指示の用法のみならず、人称代名詞の問題を扱う際に有効であることが判明した。

参考文献

- **日本語の文献**
- 庵　功雄（2007）『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 金水　敏・田窪行則（1990）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3（日本認知科学会），pp.85-115，講談社
- 久野　彰（1973）「コ･ソ･ア」『日本文法研究』大修館
- 胡　　俊（2006）「日本語と中国語の指示詞についての対照研究-文脈指示の場合」,『地域政策科学研究』3，pp.127-138，鹿児島大学大学院人文社会科学研究科
- 田窪行則･金水　敏（1996）「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3，pp. 59-74
- 田窪行則（2008）「日本語指示詞の意味論と統語論」『言語の研究-ユーラシア諸言語からの視座-語学教育フォーラム』第16号，pp. 311-337，大東文化大学語学教育研究所
- 東郷雄二（2000）「談話モデルと日本語の指示詞コ･ソ･ア」『京都大学総合人間学部紀要』第7巻，pp.27-46
- 堀口和吉（1978）「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8，pp.23-44，大阪外国語大学
- 劉　　蠡（2011）「日本語の文脈指示詞『この』の対立型と融合型―談話モデル理論による分析をもとに」,『KLS』, 第31号, 関西言語学会
- 劉　　蠡（2012）「物語における日本語と中国語の文脈指示詞の対照研究―談話構造の観点から」『日中言語対照論集』, 第14号, 白帝社

参考文献

- **英語の文献**
- Ariel, M.（1990）*Accessing Noun-Phrase Antecedents*. London Routledge.
- Brown, G. and G. Yule（1983）*Discourse Analysis*. Cambridge University Press.
- Fauconnier, G.（1985）*Mental Spaces*. MIT Press.
- Halliday, M. A. K. & R. Hasan（1976）*Cohesion in English*. Longman.
- Quirk, R. et al. （1985）*A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- van Dijk（1977）Sentence topic and discourse topic. *Papers in Slavic Philology*, 1, pp. 49-61.
- **中国語の文献**
- 沈　家煊（1999）『不对称和标记论』江西教育出版社
- 杨 玉玲（2010）『“这”、“那”系词语的篇章用法研究』中国广播电视出版社